役員エッセイ

大通公園を望む窓辺から

Disclosure Day

理事　大本（おおもと）　晃裕（あきひろ）

最近、トランプ大統領による宇宙関連の機密情報開示を示唆する発言や、さる５月８日の米国防総省による未確認異常現象（UAP）関連情報の公開などを受け、未知の存在に対する社会的な関心が高まっている。

一説には、第二次世界大戦時のフランクリン・ルーズベルト大統領の時代から政府は未知の情報を隠蔽しており、情報開示に伴うパニックを避けるため、古くから映画などのエンターテインメントを通じて、段階的に人々の心に免疫を植え付けてきたとも言われている。スティーヴン・スピルバーグ監督の『未知との遭遇』や『E. T.』といったSF作品もその文脈で語られがちだが、今秋、日本でも同監督の最新作『Disclosure Day』が公開される。これが単なる娯楽映画なのか、国防総省の動きと連動した「計画的な開示」の一部なのか、興味は尽きない。長年、日陰者扱いされてきた都市伝説界隈が「我が意を得たり」と活気づいているのも頷ける。

一方で、人類の歴史を揺るがす偉大な発見や名作の誕生には、しばしば「人智を超えたひらめき」が伴う。物理の分野では、アインシュタインの相対性理論やニコラ・テスラの交流電流、また音楽において、ポール・マッカートニーの『イエスタデイ』や谷村新司の『昴』といった名曲も、夢やふとした瞬間のインスピレーションから生まれたとされるが、こういう逸話は枚挙にいとまがない。

こうした潜在意識からの唐突なひらめきを「高度な地球外生命体からのテレパシー」と捉えるロマンのある見方もある。もしこれまでの人類の科学技術の飛躍的発展が、我々の理解を超えた存在から小出しに与えられたものだとしたら、大国が密かに研究を進めているかもしれない底知れない最先端技術の奥深さに、恐ろしさを覚えずにはいられない。

庭木の手入れと観葉植物

理事　沖（おき）　一郎（いちろう）

私の家には庭があります。今は亡き両親が造った庭です。街の中ですが、雑木林で自然林のようです。白樺やナナカマドの中に北海道では珍しい桐やオンコ、木蓮、梨、竹、様々なツツジ、シャクナゲ、テッセン、バラ、野イチゴ、山椒、特にエリモシャクナゲは庭の中心で白い花が咲き競っていました。梨も秋には多くの実をつけ、兄弟で収穫したものです。

両親が亡くなってしばらくはそのままで放置しておりましたが、剪定をせずにいたためすっかり変わってしまいました。30年ほど前から元の庭に戻すため、仕事が終わってから庭仕事を始めました。雑草などの下草を刈り取り、庭木の剪定、庭石の設置、芝生の敷設、敷石や新しい植木の植栽など素人の私が見様見真似でチャレンジしました。

今は季節ごとに楽しめる庭になっています。春は木蓮の鮮やかなピンクの花から始まり、紫ツツジや佐賀ツツジ、桐の花、シャクナゲと楽しませてもらっています。今ではすっかり庭師です。

最近は、観葉植物の世話で大忙しです。病院の温室ではモンステラ、ヒメモンステラ、ポトス、アイビー、カポック、ラン、コーヒーの木、パキラ、ガジュマル、ウンベラータ、ベンジャミン、サンスベリアなどなどを、まず水耕栽培して発芽してから植木鉢に移し増やしております。どんどん増えるため、人様にもらっていただいています。水耕栽培の奥の深さにすっかりはまっています。

さらに、好物の食べた後の枇杷の種、桃の種、柿の種やゴルフ場で拾った栗を発芽させてから鉢に移しており、そのうちに枇杷や桃、栗を収穫するのを夢見て水やりなどをしています。

庭の手入れや観葉植物の世話などは、日ごろの緊張やストレス解消に大いに役立っているようです。